

.....

狸と人形

.....



むかしむかしの夏のことじゃ。和泉の村に住む八兵衛が、夕方庭先で涼んでお
った。

ふと顔を上げると、目の前に火の玉のようなものが2、3回上がった。八兵衛
は、度胸がある男だったので、火の玉くらいでは驚かんかった。しばらくすると、
ぼうとした白い人形のようなものが近づいてきて、おいでおいでと手招きするで
はないか。なんじゃろうと思って、わけのわからんまま、その白い人形のような
ものについて行った。

そのときじゃ。家の中から出てきたおとうが、

「おい、八兵衛、どこに行くんじゃ。」

と声をかけた。その声に八兵衛は、はっと我に返った。すると、目の前の白い人
形のようなものは、霧が消えるように見えなくなってしまった。八兵衛から話を
聞いたおとうは、

「それはきっと狸のしわざじゃ。どこに連れて行かるか分からんかったのう。気
を付けにゃいかんぞ。」

と八兵衛に言うたそうじゃ。

.....

「和泉郷土誌」(昭和62年 和泉郷土誌編集委員会)に記述してある話を、読み聞かせ
のために脚色しました。